

第十一話 本のために家を建てました

●本棚は“壁食い虫”

本を美しく整ったかたちで周囲に並べ、本の背中をいつも眺められるようにし、それらにぐるりと囲まれて暮らしたい——。数千冊の蔵書が部屋のあちこちを押し、家族から白い目で見られている人にとって究極の夢は、そんな「本に囲まれた城のような家」ではないか。」

標準のスチール五段本棚に収容できるのが、ふつうの単行本でおよそ百五十から二百冊。五本並べても千冊ちょっとしか収納できない。ひと棚に前後二列並べたとしても三千冊弱。

物書きでも学者でもないのに、それほど本を持っているなら、もうリッチな蔵書家だ。誰かが本であふれた家を見れば、それだけで尊敬するだろう。いや、呆れるだけかもしれない。

しかし、マンションや住宅の限られたスペースに、五本もの本棚を置く余裕は乏しい。本棚は基本的に壁を背負うかたちで置かれる。あたりまえの話で、部屋の中央に置けば邪魔だし、第一安定が悪い。本棚は「壁を食う」家具なのだ。しかも、家屋において壁は貴重だ。四面すべて壁という部屋は考えにくく、入口もあれば窓もある。隣の部屋との間にさらに戸があったり、押し入れがあれば、ほぼ壁一面がそれにつぶれる。家族共有ならまだしも、一人の趣味で、壁を占有するわけにはいかない。

蔵書は、壁との闘いとも言えるのだ。

ところがここに、蔵書家の夢ともいべき“城”をつくった男がいる。その城とはまさしく、壁の所有権をすべて本棚に明け渡し、見渡すところ、本しか目に入らないという凄すぎる環境の家だ。

ヒギンズ教授の書齋みたい

そんな、蔵書家なら誰でも抱く夢を四十代で実現したのがNさん。一九六六年東京生まれ。都内某大学の職員を務めている。独身にして料理の達人。本の世界からスポーツ芸能まで知らないことはない物知りでもある。おいおい説明するが、彼の家は完全二世帯住宅で、彼は一人で二階、三階を使っている。一階は彼の両親が住んでいるが、二階には一階とは別に玄関があり、一階を経由しなくても、外から直接階段を上って、彼の部屋に行くことができる。もちろんトイレ、風呂つき。厨房も広い。

AV装置も万全で、スクリーンを下ろせば、プロジェクターを使って大画面で映像を楽しむこともできる。Nさんと私はひよんなことから知り合い、共通する友人も多い。年に何度か、十名ほどの仲間が集まって、彼の手料理を楽しみながら、私がかつて録り溜めた古いビデオを鑑賞する会を開いている。それで、彼の家のことはよく知っているのだ。

玄関を入ってすぐ左手に、いきなり本棚が待ち構えていて、ここには映画の本や一部ビデオが並べてある。廊下を挟んで反対側が風呂場だが、その入口近くに「風呂で読むための本棚」があるのが彼らしい。背表紙を見ると、荒川洋治、角田光代、グレゴリ青山、内田樹、レベッカ・ブラウン、嵐山光三郎と、ジャンルはさまざまだ。聞くと、とくに基準はないようだ。

まだ玄関で靴を脱いだばかりで、本丸は攻めていないのに、すでにこの布陣だ。奥へ進むと、さあこれからが圧巻。十二畳ほどの広いリビングには、テレビ、十人掛けの長テーブルと椅子以外に、家具と呼べるものは何もない。そのかわり、壁はすべて作りつけの本棚が覆い隠す。驚くべきは、三階が吹き抜けになっていてぐるり、キャットウォークをめぐるして、三階の壁もすべて本棚になっていることだ。

つまり、リビングの壁という壁がすべて本棚でできた吹き抜けの家、ということになる。

映画「マイ・フェア・レディ」で、オードリー・ヘプバーン扮する田舎娘イライザを矯正教育する言語学者のヒギンズ教授（演じるのはレックス・ハリソン）。彼の書斎が、ちょうど二階吹き抜けで、四方を本棚に囲まれていた。らせん階段と、上段の本を取るための長はしごがあったように思う。だから、Nさんの「本の家」を説明するとき、「ほら、『マイ・フェア・レディ』で、ヒギンズ教授の書斎があったでしょう、あんな感じ」と言えば、映画好きならわかるはず。初めて彼の家に足を踏み入れた人は、この常識では考えられぬ、本に特化した部屋を眺めて、みんな歓声を上げる。あとは、無遠慮にじろじろと眺めるしかない。それが許される部屋なのだ。名づけて「本の栖（すみか）」。以後、そう呼ぶ。

「本に殺される」

そういえば、Nさんがこの家を建てる前のことを私はまったく知らない。時間を作ってもらって、少し、そのあたりのことを取材させてもらった。

Nさんの実家は、祖父の代から続くお米屋さん。いまの家は二〇〇七年十二月に竣工したが、その前は店舗兼住宅で、築五十年は経つ木造二階建てだった。Nさんはここで生まれた。父親は損保関係の会社に勤めるサラリーマンだったが、祖父の頼みもあって家業を継ぐ。継いだはいいが、お米をスーパーや量販店で買う時代となって、経営は苦しくなっていた。Nさんに父親の後を継ぐ気はなく、家を建て替える一年前に店はたたんでしまったという。

Nさんは、この店舗兼住宅の二階に自分の部屋（六畳、和室）を持っていた。ちなみに彼は大学も都内だったから、ずっと実家から通い、下宿生活を経験したことがない。

この六畳間が要するに本だらけの部屋だった。

「入口をのぞいて、壁はすべてスチールの本棚で埋まってました。本棚の上は天井まで本を積みあげて、床も本が積んであるから、まさに足の踏み場のない状態で、ベッドのところまで行くまでのところだけ、道が空けてある。ケモノ道、ですね。それだけじゃない。

自分の部屋以外の場所も、空きを見つけたら、本を置いていた」

そうなっちゃうんだよなあ、結局。私はちっとも驚かない。いちばん好奇心の強い青春に、本の魅力に取り憑かれると、あとは一瀉千里だ。水が高きから低きへ流れるように、必然的に本は増えていくのだ。

繰り返すが、Nさんの当時の実家は古い木造建築である。本のあまりの重さに耐えかね、家中がミシミシと音を立てる。

「家を建て替えるもっとも大きな理由になったんですが、下に住んでいる母親が、天井がミシミシいうんで、怖いと言い出した。『本に殺されるう！』って（笑）」

それでも、外出すれば本を買ってくる。そのうち、母親の目を気にするようになり、外から帰ったら、いったん、裏口に本を置いて、「ただいま」と何食わぬ顔して家に入り、裏口に本を取りに行くようなマジックも使ったという。

米屋の廃業が決まった時は、家の老朽化も進んでいたのだから、建て替えるしかないという結論はすでに出ていた。本来は両親の役目だろうが、Nさん曰く「両親の経済力には期待できないので」と、大学生の身分でありながら、すでに近い将来、自分の手で家を建て替えようと思っていた、というのだ。すごい大学生。

S F ミステリ少年だった

「母親が『本に殺されるう！』って言うぐらいですから、建て替える以上は、たくさんある本を、どうにかきれいに収納したいという気持はあった」とNさん。

そもそも、Nさんが本好きになったのが小学校の高学年の頃。家から駅までの途中にある、大きな幹線道路沿いに、二軒並んで古本屋があった。片方は最初、新刊書店と兼業でのち古本だけを扱うようになった。駅と自宅の行き帰りに二つ並んだ古本屋があるとは心強い。ここへN少年は通うになる。

「最初はマンガ。三百二十円ぐらいのコミック本があったでしょう。あれを、安く買ってました。そのうち、筒井康隆とか、日本のS Fが好きになって、過去にさかのぼってエンタテインメント系の本、とくに文庫を探すようになったんです」

中学校の★高学年【★→三年生？】ぐらいから、神保町へも通うになったというから筋金入りの本好きと言っていいだろう。いまはなき泰文社でS Fマガジンのバックナンバーを探していた、というからなかなかのもの。ちなみに、先日亡くなった小松左京の作品もよく読んだ。「一冊、と言われれば、やはり『果てしなき流れの中に』でしょうか」とNさんは懐かしそうに話す。

Nさんが少年時代を送った八〇年代、角川文庫がさかんに日本のS F、ミステリに力を入れ、次々と文庫化していた。老舗のハヤカワ、創元社も黎明期からの日本S F、ミステリの基本をちゃんと押さえている。集め出すときりがないぐらい、充実したラインナップが各文庫に見られた。

Nさん宅の本棚を見ていると、なるほどSFミステリ少年時代の残滓が、あちこちに散見できるが、小林信彦、川本三郎、和田誠あたりのコレクションも充実しているし、藤枝静男、木山捷平、尾崎一雄、金井美恵子、庄野潤三といった渋好みの作家もちゃんと並んでいる。文庫で言えば、岩波、ちくま、講談社文芸、中公、福武など、本好きの尺度を示すような文庫もかなりの数を集めている。「ほほう、さすがだな」と言うところ。大和書房から出た、山田太一のドラマシナリオ本のコンプリートも目を引く。そうそう、Nさんとは、山田太一の話でも盛り上がるのだ。

Nさんのシブ好みがわかるエピソードを一つ。

「ぼくが本好きってことは、表立っては表明していませんが、知る人は知っていて、こないだ、新人で本好きって若者の男性が、ぼくと話したいっていうんで、一緒にご飯を食べたんですが、どんな作家が好きなのと聞くと、『いや、これまで言って、知ってる人がいなかったんで、言っても無理かも』なんて言う。いいから、言ってみろよって促したら、『後藤明生なんです』って言う。なあんだ、後藤明生かって、いろいろ話したら、その新人、『後藤明生のことを知っている人に初めて会いました』って」

ちなみに、後藤明生とは一九九九年に亡くなった純文学作家。「内向の世代」と呼ばれる文学史的グループに属し、『挟み撃ち』『夢かたり』『吉野大夫』などが代表作。没後の再評価の機運高く、古書価のすこぶる高い作家でもある。

建築科探しとその決め手

Nさんは家を建て替える数年前から、家作りのための行動を始めていた。いわば、本のために建てる特殊な家である。いきおい建築家選びには慎重になった。

「ネットや建築雑誌で、どの建築家に頼むか調べるようになりました。結局、お願いすることになった杉浦充さんは、事務所のホームページを見たのがきっかけです。下高井戸に、杉浦さんが設計した家がオープンハウスとしてお披露目されるというので、それも見に行きました。そこはテレビディレクターの家で、本棚の使い方がよかったです。それで杉浦さんに会ってみた」

それが二〇〇四年八月のこと。そこから二年以上かけて、Nさんは杉浦さんと何度も会って、いろいろアイデアを出し合いながら、夢のような話を具体的にかたちにしていった。

「杉浦さんは、こっちがアイデアを出すと、すぐ『こんな感じですか』とラフスケッチして画にしてくれた。それがよかった。ぼんやりしたイメージが形になることで、自分のやりたかったことがはっきりする。建築に対する考え方にも共鳴して、最終的に決定してお願いすることになった」

設計した杉浦充さんにも話を聞いてみた。

「Nさんがご覧になった下高井戸の家は、私が大手ゼネコンを辞め、独立して最初に請け負った仕事です。オープンハウスを見て、仕事を発注してくれたのも、Nさんが初めて

です。だから、うれしかったですね」

杉浦さんは多摩美術大学の建築科を卒業し、大手ゼネコンで三年間、施工と設計に携わった。「最初の二年はほとんど現場監督で、さまざまなトラブルにも対処しました」という。Nさんが杉浦さんを信頼したのもそこで、大学を出ただけの建築家ではなく、現場を知っていること、近隣との折衝の際の勘所もよく呑み込んでいることなどが、安心感につながった。

杉浦さんが、Nさんの住んでいた元の家を最初に見たとき、かなり老朽化が進み、危ない状態だったと言う。

「玄関からNさんの部屋まで、階段を含め、いたるところに本がある、という印象でした。部屋へ入ると、まさに本だらけで、木造の二階でしたし、積載荷重をオーバーしていることは明らかでした。Nさんの希望である『本をなんとかしたい』というのもよくわかった」

家を建て替えるスタートラインが「本」だったのだ。これはNさんの希望。ご両親も住む家だから、当然、彼らの意見もある。

「前の家は敷地いっぱい建てられていたので、隣家との間も狭い。お母さんは、全く日が入らないことを気にしておられた。だから、中庭を作って、そこから太陽の光が入るようにした。本のため、ということ以外にも、『光の入る家』というのがコンセプトだったんです。『部屋が明るくなってびっくりした』とお母さんは言っておられました」

「本の栖」が背負う「積載荷重」という問題

できあがった「本の栖」は、ぐるり本に囲まれた吹き抜けの家として、さまざまな建築雑誌や、テレビ番組でも紹介されるようになった。「スッキリ！！」で「知識をつめこんだ家」として放映されたときは、レポーターと一緒にNさんも登場。「(蔵書数は) たぶん一万五千冊。本が見えていないと嫌なので、自分の生活の中で、本に囲まれて、しかも本が見えているというのが憧れ」と答えていた。

杉浦さんも、Nさんと家作りについて話した時、「本に囲まれて死んでもいい。住人よりも本」という印象を持った。

しかし、設計上、本だらけの家を作るには、本のあまりない家とは違った要素が出てくる。つまり「積載荷重」の問題だ。なにしろ、本は重い。想像以上に、家へ負担をかける。この問題をクリアしないかぎり、「本に囲まれた家」は成り立たない。以下、次号へ。